

環境保全功労者功績内容等

氏名	功 績
<p>安藤 忠雄 (あんどう ただお)</p> <p>建築家、国立大学法人東京大学特別栄誉教授</p>	<p>1. ひょうごグリーンネットワーク事業代表呼びかけ人としての功績 阪神淡路大震災における延焼の防止や人々に安らぎをあたえてくれた樹木の大切さを認識した安藤氏を中心とする呼びかけにより、平成8年からボランティアの協力や募金の呼びかけを通じて、被災地の緑の復興に向けた植樹運動を展開。「ひょうご住宅復興3カ年計画」に基づき被災10市10町に建築される復興住宅12万5千戸に、1戸あたり2本ずつ苗木を配布し、10年間で25万本の植樹を目標。目標を上回る30万本の植樹を達成。住宅だけではなく公園や街路樹等の植樹も実施。</p> <p>2. 瀬戸内オリーブ基金呼びかけ人としての功績 産業廃棄物の不法投棄で荒廃した瀬戸内海の豊島の自然を回復するために、「オリーブ」等の木を植樹。中坊公平氏とともに呼びかけ人となり、平成12年より植樹のための募金活動を開始。今後、豊島を始めとする、直島、淡路島といったその他の瀬戸内海の島々に、100万本の木を植えることを目標。これまでの植樹本数44、227本(平成18年4月10日現在)</p> <p>3. その他 大阪都心部の毛場桜之宮公園全域と中之島公園を結ぶルートを「平成通り抜け」と位置付け、市民等からの募金により、約1000本の桜を植える「桜の会・平成の通り抜け」事業の呼びかけ人をして平成16年度から活動から活動を展開。</p>
<p>岡田 光正 (おかた みつまさ)</p> <p>国立大学法人広島大学理事・副学長</p>	<p>氏は、上下水道における浄水技術を中心に水処理に関する研究領域で多くの実績を上げ、その業績は日本下水道協会、日本水道協会等で高く評価されている。また、湖沼や沿岸の生態系、特に干潟生態系、アマモ場生態系を研究対象とした生態工学的な視点からの研究は、干潟やアマモ場の理解と人工的な造成の設計に広く寄与し、その業績は、平成17年度の環境科学会学術賞に結びついた。近年は廃棄物の分野にゼロエミッション、グリーンプロセスという概念を持ち込み、廃棄物の再資源化、適正処理に結びつく多くの業績を上げている。学会活動にも多くのエネルギーを注ぎ、環境科学会や日本水環境学会の理事を長年務め平成15年～17年度には日本水環境学会の会長を務めた。</p> <p>また、当省の水質保全行政における環境基礎学の専門家として水質規制のあり方の検討に参画し、特に内湾や湖沼といった閉鎖性水域の水質保全について、政策の節目となる重要な答申のとりまとめに主導的な立場で尽力され、水環境保全行政の推進に多大なる貢献をされた。平成16年4月には水環境部会総量規制専門委員会委員長として、東京湾・伊勢湾・瀬戸内海の3指定水域への汚濁負荷量の削減策の基本的考え方となる「第6次水質総量規制の在り方」をとりまとめられ、また、平成17年1月には水環境部会湖沼環境保全専門委員会の中心メンバーとして、湖沼水質保全特別措置法改正案の基本となる「湖沼環境保全の在り方について」をとりまとめられた。なお、氏は現在も引き続き、水環境部会総量規制専門委員会委員長、瀬戸内部会委員、有明海・八代海総合調査評価委員会委員を務められ、諮問案件等それぞれの懸案事項について主導的な立場で検討に携わっていただいているところである。</p>
<p>片桐 佳典 (かたぎり よしのり)</p> <p>財団法人神奈川県下水道公社 環境調査部長</p>	<p>氏は、昭和46年に神奈川県へ入庁後、本年3月に退職するまで、35年の長きにわたり、同県で環境行政を担当し、化学物質・大気・水質・廃棄物行政の推進に多大な貢献を行った。</p> <p>総理主宰「21世紀『環の国』づくり会議」の提言に基づき、平成13年に設置された、「化学物質と環境円卓会議」(事務局環境保健部)は、市民、産業、行政の代表が化学物質の環境リスクに関する情報の共有と相互理解を促進するリスクコミュニケーションの場である。氏は、地方公共団体を代表する唯一人の委員として、同会議の設置当初から本年2月までの長期にわたりこれに参画し、長年地方環境行政に携わった経験に基づく積極的な発言等を通じて、会議の運営に貢献した。また、氏は、環境保健部の「化学物質と環境汚染実態調査物質選定検討会」へ、平成14年の設置初年度に参画し、同調査における物質選定の効率化・合理化の推進に貢献した。さらに、片桐氏は、環境庁水質保全局の「ダイオキシン類未規制発生源調査検討会」へ、平成12年・13年度に参画し、ダイオキシン発生源の実態調査と取りまとめに貢献した。</p> <p>このほか、氏は、(財)日本環境衛生センター評議員及び日本廃棄物処理施設技術管理者協議会評議員を務めており、環境行政の推進を支える当該団体の円滑な運営と発展に貢献している。</p> <p>以上の通り、氏は、神奈川県のみならず、我が国の環境行政の推進に、長年にわたり、多大な貢献を行っている。</p> <p style="text-align: center;">平成10年 全国環境行政協議会環境行政貢献表彰</p>

氏名	功 績
<p>桑野 園子 (くわの そのこ)</p> <p>国立大学法人大阪大学大学院人間科学 研究科教授</p>	<p>氏は聴覚や視覚を通して環境諸因子から人が受ける影響を把握する環境心理学の専門家として卓越した見識を有している。</p> <p>平成10年の環境基準改定にあたり、中央環境審議会より騒音の影響に関し、我が国の実態に基づく知見の充実に努めることが指摘された。今後の環境基準等を見直すうえで騒音の発生状況と住民の居住実態に対応した暴露・反応関係を明らかにする必要があるが我が国独自の確立した手法がない。</p> <p>このため、環境省では平成12年度より日本騒音制御工学会内に「騒音の影響評価に関する研究委員会」を設置しアノイアンス(不快感)と睡眠妨害に関わる騒音影響の調査手法について検討を進めている。氏は本委員会委員長として社会調査並びにアクチメトリー(体動変化)および調査対象者の自宅での入眠期に関する現地実験に基づいて騒音影響を把握するための日本の実情に応じた標準的な調査手法をとりまとめた。現在は、開発された手法に基づき、各種音源別のデータの収集解析を進めているところである。</p> <p>平成15年度より「騒音評価手法及び規制手法等検討委員会」に委員として参画し、航空機騒音、鉄道騒音、工場・事業場騒音、建設作業騒音等にかかる評価・規制手法の検討を進めている。</p> <p>平成16、17年度には航空機騒音に関する評価方法検討委員会に委員として参画し、環境基準値の不確かさの是正に関する検討を行い技術的解決方法を提案した。</p>
<p>神山 宣彦 (こうやま のりひこ)</p> <p>東洋大学経済学部教授</p>	<p>労働者の健康障害防止を目的にアスベスト及び繊維状物質の測定法と有害性評価法に関する基礎的研究を行い、作業環境、一般環境、さらに生体組織中のアスベスト測定に電子顕微鏡技法を導入して多くの重要な業績をあげた。一方、繊維状物質の生体影響評価に関する研究を多くの研究者と協力して進め、研究材料作製と物性研究の面から基礎的な貢献をした。</p> <p>また、講演や執筆などにより、石綿や石綿の測定法に関する知見の普及に努めるとともに、昭和52年から10年間、環境庁アスベスト発生源対策委員会に参加し、石綿の発生源対策について検討し、昭和63年から平成10年まで10年間にわたり環境庁環境研修センターにおいて、電子顕微鏡による大気中アスベストの測定方法の講習の講師を務め、同方法の普及に努めた。さらに、平成11年から4年間、労働省石綿及び繊維状物質委員会に参加して、石綿等の有害性について調査し、平成17年度には、アスベスト緊急大気濃度調査検討会座長を務め、石綿の大気濃度調査の実施方法や結果について取りまとめを行うなど、大気環境行政に多大な貢献をしてきた。</p> <p>そのほか、国際溶接会議(IIW)安全衛生委員会日本代表委員として、発展途上国に対する基礎技術である溶接技術の安全衛生の普及・支援活動に協力している。また、日本産業衛生学会代議員として、産業衛生技術に関わる専門家相互の意見や技術交流を行い、総合的な産業衛生活動の発展に貢献している。</p> <p>これらの功績は十分表彰に値する。</p>
<p>小早川 光郎 (こばやかわ みつお)</p> <p>国立大学法人東京大学大学院法学政治 学研究科・法学部教授</p>	<p>平成4年から中央公害対策審議会委員となり、平成5年11月からは中央環境審議会委員として平成17年1月まで12年余に亘り審議に参画した。</p> <p>平成12年12月答申の「新環境基本計画－環境の世紀への道しるべ－」は、21世紀初頭における環境政策の基本的方向と取組の枠組みを明らかにするものであり、氏は企画政策部会委員として、また、部会における審議の論点を整理し、中間取りまとめ案を起草する環境基本小委員会のメンバーとして参画し、答申の取りまとめに尽力した。</p> <p>また、氏は環境保健部会にも所属し、この間「P R T R(化学物質排出・移動量届出)制度」の法制化(「特定科学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」)や化学物質審査規制法への生態影響の観点の導入などに関する議論の取りまとめに尽力した。</p>
<p>全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 (ぜんこくぎゅうにゅうぱくのさいりょうをかん がえるれんらくかい)</p> <p>代表 平井 成子</p>	<p>全国牛乳パックの再利用を考える連絡会は、牛乳パックの再利用を通じて広く自然保護や環境保全の意識を啓発するとともに、ごみの減量リサイクル及び資源の有効利用などの3Rを推進することを目的とする「牛乳パックの再利用を考える全国大会」を主催者の一人としてこれまで毎年開催している。また、牛乳パックの回収を促進するための拠点回収ボックスの配付は、平成17年度末で全国に1,830個が設置されるに至り、その設置場所については環境学習の一環として自治体や小中学校から申し込まれるケースが増えている。</p> <p>さらに、2001年には地球環境基金助成事業として、フィリピンにおける牛乳パックリサイクルの活動支援事業を実施し、フィリピンでの牛乳パックリサイクルを進める一助となった。</p> <p>このように、当該団体における内外に渡るこれまでの活動は、牛乳パックの再利用のみならず、循環型社会構築や環境保全に関する普及啓発及び環境教育等に対し多大な功績を有するものであり、当該表彰を授与するにもっともふさわしい団体の一つであると考えられるものである。</p>

氏名	功 績
<p>高松 武次郎 (たかまつ たけじろう)</p> <p>国立大学法人茨城大学 広域水圏環境科学教育研究センター教授</p>	<p>氏は、土壌化学、分析化学の専攻であり、土壌中各種元素の分析・定量手法及びそのための装置を数多く開発されている。さらに、土壌と大気、雨水、植物などの周辺環境中での金属元素分析を通じ、各元素の環境中での分布や動態を明らかにするとともに、土壌中における金属の移動や形態変化など土壌の金属汚染に係るメカニズムを明らかにするなど、これまで、一貫して土壌環境とその汚染メカニズムの解明に係る研究に携わっておられる。特に、重金属の物理化学的性質が土壌環境中での挙動に及ぼす影響について、幅広い卓越した識見を有する国内の第一人者である。</p> <p>このように土壌環境に卓越した識見を有しておられるため、平成15年度から、環境省中央環境審議会専門委員として、水環境・土壌農業合同部会バイオレメディエーション小委員会にご参画頂き、「微生物によるバイオレメディエーション利用指針について(意見具申)」(平成17年2月14日)の中心メンバーとしてとりまとめにご尽力いただくとともに、同指針策定後も同委員会審査分科会に所属され、指針に基づく個別技術の適正な審査に御協力頂いている。</p> <p>さらに、平成17年度より、「射撃場に係る鉛汚染対策検討会」にご参画頂き、射撃場に係る鉛弾由来の鉛汚染調査・対策手法についてガイドラインを策定すべくご尽力いただいていることに加え、自ら種々の調査・実験を行い、射撃場における鉛の挙動を明らかにするとともに、新たな鉛汚染対策手法を上記検討会に提案するなど、本ガイドラインの策定に向け多大な貢献をされている。</p> <p>上記のとおり、氏はこれまでの研究業績から土壌環境研究の分野に多大な功績を挙げられたのみならず、土壌環境政策の推進についても多大な貢献をしている。</p>
<p>武田 信生 (たけだ のぶお)</p> <p>国立大学法人京都大学大学院工学研究科教授</p>	<p>京都大学衛生工学科で、長年にわたり廃棄物処理の工学的研究に精励し、ダイオキシン類対策技術の研究開発に成果をあげ、さらに焼却技術の専門家として、ダイオキシン類の発生防止のためのガイドライン策定やごみ焼却施設の技術基準の策定、大気汚染防止のための排気ガス処理技術の向上に尽力した。また、ごみをスラグ化し、リサイクルできるガス化溶融炉の基礎を築き、メーカーの技術開発を先導した。このほか、高効率ごみ発電の研究を通じ、市町村におけるごみ発電の導入拡大に寄与し、有害廃棄物処理の分野では、熱分解処理技術の研究を通じ、安全な処理方法の確立するなど環境保全の推進に多大な貢献をしている。</p>
<p>特定非営利活動法人 埼玉環境カウンセラー協会 (とくていひえいりかつどうほうしん さいたまかんきょうかうんせらーきょうかい)</p> <p>会長 伊藤 安男</p>	<p>同会は、平成10年3月14日の設立以来、環境負荷低減をはかり持続的発展に向けた取り組み、生活と科学物質のかかわり、地球温暖化防止対策に向けた取り組み、環境マネジメントシステム構築支援、環境教育・環境学習指導者養成、循環型社会の構築等をテーマに環境保全講習会・環境研修会を実施。延べ22回開催し、参加者数は約2300名に上る。</p> <p>また、リスクコミュニケーションの取り組み、エコアクション21、ISO14001構築支援のための講習会及び研修会へ講師を派遣。特に、中小企業による環境保全活動の取り組み支援や小中学校での環境教育、環境学習へのゲストティーチャー派遣を行っている。</p> <p>さらに、地方自治体における環境関連の審議会、委員会への委員参画するとともに、各地での環境関連行事(エコフェスティバル等)への参加を行っている。</p> <p>なお、環境保全・改善に関する公開講座の開催をとおして地域の環境保全に尽力したことが認められ、平成16年6月7日に「さいたま環境賞県民大賞」を受賞した。</p> <p>同会の活動は、県内外問わずに地域住民、事業者、自治体のそれぞれの立場での環境保全活動の重要性についての意識向上に貢献し、事業所、大学、行政との環境面でのパートナーシップの形成に尽力している。</p>

氏名	功 績
<p>橋本 道正 (はしもと みちまさ)</p> <p>NPO法人環境カウンセラー全国連合会 副理事長</p>	<p>製造業の会社に約43年勤務。環境部門を担当。経団連の環境委員、PCB処理技術対策委員を務める。JICA技術員として途上国を指導。</p> <p>退職後、1997年度に環境カウンセラー(事業者部門)登録。1998年12月、環境カウンセラーズぐんまを設立し、初代会長として群馬県内における環境パートナーシップの促進に努めた。特に群馬県環境政策課との協働による「群馬県地域環境学習推進事業」を1999年度から受託し、県内各地で県民に対する環境学習活動を推進した。また、会長在任中、群馬県環境部長の諮問機関である「群馬県環境懇話会」委員を務めた。</p> <p>次代を担う環境教育の重要性を痛感し、現在、地域の小中学校に出前環境教育を実施。また、難聴者の方々に手話通訳を通して環境保全講座を行っている。</p> <p>2001年、環境カウンセラー全国連合会の設立に尽力し、副理事長に就任、2003年にNPO法人化後も引き続き副理事長として先崎理事長を補佐し、今日に至る。</p> <p>2002年10月27日、群馬県知事より「群馬県環境功績賞」を受賞。また、2004年3月4日に居住地域である太田市内小学校校長より、ボランティアによる教育活動に対し感謝状と受講児童の感謝作文集を受ける。</p> <p>平成14年群馬県知事より環境功績賞を受賞する。</p>
<p>平野 耕一郎 (ひらの こういちろう)</p> <p>横浜市環境科学研究所基礎研究部門主任 研究員</p>	<p>環境省が昭和60年当初から毎年実施してきた大気汚染測定機器維持管理講習会において、地方自治体の担当者や保守管理会社の担当者などに大気汚染自動測定機に対する適切な維持管理法の知識と技術を過去20年間指導してきた。</p> <p>過去10数年、環境保健サーベランス・局地的大気汚染健康影響調査検討会の委員として、大気汚染に係る健康影響環境保健サーベランス調査および局地的大気汚染の健康影響に関する疫学調査に参画。</p> <p>大気汚染常時監視マニュアルの作成および改訂に係る検討委員会の委員として、オキシダント自動計測器を中心に改訂作業に参画。</p> <p>大気汚染に係るJISの作成および改訂の検討委員会に使用者である自治体の委員として、環境測定等のJISの作成および改正に参画。</p> <p>平成15年度より光化学オキシダント生成の主要原因物質である揮発性有機化合物(VOC)の対策に係る検討にあたり、VOC測定機の実情とその性能評価試験、中央環境審議会大気専門部会揮発性有機化合物測定方法専門委員会の委員、VOCの測定機器の性能試験方法の検討委員、環境大気中のVOC濃度モニタリングに係る測定・分析方法検討会の委員および簡易測定法に係る情報の収集検討委員会の委員長として、VOC規制に係る様々な業務に参画。</p> <p>平成17年度アスベスト緊急大気濃度調査に関する検討会の委員として参画。アスベスト濃度の測定上の問題点の精査や対応策について、指導、尽力された。</p> <p>平成17年度に大気汚染常時監視局で使われている環境大気測定用窒素酸化物自動測定機(NOx計)において一部メーカーの測定機に欠陥が発覚した際、係る事態の再発を防止のための方策について環境大気測定機の信頼性評価検討会に参画。</p> <p>以上、様々な分野において、環境測定の研究者として大気環境行政に多大な貢献をしてきた。これらの功績は十分表彰に値する。</p>
<p>細田 衛士 (ほそだ せいじ)</p> <p>慶應義塾大学経済学部教授</p>	<p>氏は、環境問題を読み解き、深い洞察力を得るのに、循環型経済社会の構築に向けた経済学の貢献のあり方を日々探求され、「グッズとパズルの経済学」等著書を通して、循環型社会の基本原則について、経済学的な観点から分かりやすく解説し、その普及啓発に大きく貢献された。</p> <p>また、17年の10月から中央環境審議会廃棄物・リサイクル対策部会の国際循環型社会形成と環境保全に関する専門委員会委員として、廃棄物等の循環資源の問題が国際化する中、経済的合理を勘案しつつ、その適正な利用・処分の考え方の確立に貢献された。</p> <p>さらに、長き渡り、中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会委員として活躍され、自動車リサイクル法の制定、廃棄物処理法の改正、容器包装リサイクル法の改正の検討に携わり、循環型社会形成の推進のための制度構築に貢献されました。</p>

氏名	功 績
<p>松田 美夜子 (まつだ みやこ)</p> <p>富士常葉大学環境防災学部教授</p>	<p>埼玉県川口市のリサイクルシステム「川口方式」にかかわり、ごみ減量システムの研究を始める。以降、500か所以上の地方自治体取材するとともに、ヨーロッパを中心に15か国を歴訪。</p> <p>平成5年10月から、生活環境審議会廃棄物処理部会廃棄物減量化・再利用専門委員会委員として、容器包装リサイクル法の検討にかかわる。</p> <p>平成6年には、内閣総理大臣の主催により開催された「21世紀地球環境懇話会」の委員を務める。</p> <p>平成8年5月、全国でごみ問題の解決に向けて活動する個人や団体のゆるやかなネットワークである「元気なごみ仲間の会」の発足と同時に代表に就任し、市民・事業者・行政のパートナーシップづくりに尽力。</p> <p>平成13年1月からは、中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会委員として、自動車リサイクル法の制定、廃棄物処理法の改正、容器包装リサイクル法の改正の検討に携わり、循環型社会形成の推進のための制度構築に貢献。平成15年1月には同審議会総合政策部会委員に就任。平成13年1月から、産業構造審議会環境部会委員も務める。</p> <p>生活環境評論家として幅広く活動し、ごみと人とのかかわりを暮らしの現場での体験を通して積極的な提言を行っている。</p>
<p>森下 郁子 (もりした いくこ)</p> <p>社団法人淡水生物研究所所長</p>	<p>氏は、長年にわたり河川の生物学的な水質判定のフィールド調査を実践し、多くの一般の方が参加して行う方法の体系化に尽力された。この成果が、後の環境庁等による「全国水生生物調査」や「こどもホタルンジャー事業」をはじめとする水環境保全に係る普及啓発、生態系を含む水環境全体を人間活動と関連付けて見ていく施策展開の発端となったものである。</p> <p>また、中央公害対策審議会委員（昭和58年から平成3年まで）、環境省独立行政法人評価委員会委員（平成13年～15年）、有明海・八代海総合調査評価委員会（平成15年から現在まで）など、水環境問題を中心に環境省の重要な政策立案に参画されてきている。</p> <p>氏は、自らが実践し方法を体系化した水生生物による水質判定方法について、その目的は「普通に暮らす人たちが普通に豊かさと快適さを感じられるようにしたい」であり、市民参加と、環境教育（自然環境への人間活動の関わりは切って考えることのできないもので順応・調和が必要なこと、各河川等にはそれぞれが特性があり、多様であることの認識）としての重要性を強調している。環境省の「全国水生生物調査」は昭和59年度以来継続して実施しており、平成16年度には参加総数9万人余り、調査地点約4,200箇所を数える規模のものに成長している。そして、現在、水環境保全施策において、国民の理解と協力を得て水環境の改善を図っていくために、多くの人が共感できる水環境の健全性の評価方法を検討していくこと等が、重要な柱になっている。</p> <p>氏の活動は、これらの施策の流れの形成に大きく寄与したものであり、特に顕著な功績である。</p>

氏名	功 績
<p>山里 洋介 (やまさとようすけ) 興研株式会社 専務取締役</p>	<p>氏は陸上自衛隊において、陸上幕僚監部化学部長や北部方面総幹部装備部長、陸上自衛隊化学学校長などを歴任し、陸上自衛隊在職中は、地下鉄サリン事件を指揮するなどテロ対策、化学兵器対策に重要な業績をあげた。 平成14年9月、寒川町のさがみ縦貫道路建設現場で作業員が旧軍毒ガスに被災するという事案が発生した。氏は、さがみ縦貫道有識者検討会の委員長として、発見された旧軍毒ガスや汚染土壌等を安全に無害化処理することに尽力し、平成16年12月には処理を完了した。 また、茨城県神栖市において、通常自然界には存在しない有機ヒ素化合物であるジフェニルアルシン酸による環境汚染等が発生するなど旧軍毒ガス弾等による問題が顕在化したため、政府全体で対策を行うため、閣議了解がなされた。環境省においては、昭和48年「旧軍毒ガス弾等に関する全国調査」フォローアップ調査を実施し、国内における毒ガス弾等に関する情報を、138の事案にとりまとめた。フォローアップ調査の取りまとめや環境調査に実施にあたっては、国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会において、被災未然防止の観点から対策の検討を行っている。氏は本検討会の検討委員として、フォローアップ調査の取りまとめ、毒ガス弾等に関する環境調査計画立案、旧軍施設が配置されていた区域内において、毒ガス弾等の埋設に留意して工事を行うための「土地改変指針」の取りまとめに行うなど旧軍毒ガス弾等対策に多大な貢献をしてきた。 上記のとおり、氏はこれまでの業績から、旧軍毒ガス弾等対策について、多大な功績を挙げられたのみならず、毒ガス弾等による被災未然防止についても多大な貢献をしている。</p>
<p>若松 伸司 (わかまつ しんじ) 国立大学法人愛媛大学農学部教授</p>	<p>大気汚染濃度の統計的な解析手法に関する理論構築と、3変数型の対数正規分布理論の活用に関する研究を実施し、この方法により、環境基準の評価方法に新たな道を拓いた。 地上でのモニタリングデータの解析や航空機を用いた、立体分布観測により、我が国において、初めて、光化学大気汚染の立体的な動態を明らかにした。 気象・拡散・反応を含んだ三次元数値モデルを用いて、光化学オゾンの立体的な挙動を定量的に明らかにする事に我が国で初めて成功、NOxやVOCの発生源の変化が都市のオゾンの及ぼす影響を解析し、発生源対策評価を行った。(これにより、光化学大気汚染が都市周辺地域で相対的に高濃度化している原因が解明された。)また、これまで、その実態が明らかではなかったVOCの発生源に関する研究を実施し、特に自動車からの寄与が大都市域では大きい事を明らかにした。さらに、VOCの光化学反応性の評価に関するモデル解析研究を行い、光化学オゾン生成能についての日本における実態を明らかにした。これらの一連の研究成果はVOC規制の法制化への理論的な根拠を与えた。 これら豊富な知見を有し、中央環境審議会(大気環境部門所属専門委員)・大気環境部会測定方法専門委員会委員、全国星空継続観察研究委員会(スターウォッチング・ネットワーク)委員、環境影響評価技術検討会委員、大気常時監視測定結果に係る検討会委員として、大気環境行政に多大な貢献をしてきた。 これらの功績は十分表彰に値する。</p>